



漢畫獨稽古

乾



漢画摺古自序



乾坤の造化は形象のあやうのちあらし日月星辰天の
有りて形象成りし山川草木地水就て形象成りし
人倫禽獸の中央小位して形象あり是天然自然
の造化あり其形象ありしもの小なりがいて各其の成
得て板小存とるもの画も有り板小傳神の意有り
畫北法たり如解事ことしんべうしん落小也地系地
系小あり漢画摺古武丹を編り是九年が一毛
をあけし和字の人形得書とるつゝ要とるれい
文字文法ふ切もしん拙とる書を深て其初より
強弱を有りて画成字法の相をりしは小花を山くは

位置経言のたりやう樹木小鳥の寫しわいより
得るその用いやう画意の多様印象印柳を多
くする者もたゞに國字成りつゝはゆるやう
い其ういかりし如所い息をかくて神字のたより
和後の編み人物の描法平官様履冠等の古意を
とりとり濃彩のほゆる神仏像の描法も
くもたゞうち各を分て神字此一画とを
しとる

文化四年九月

山陽堂主人達

〇〇

漢畫獨枕音古目錄 卷

總論

寫生法

寫意飛鶴之圖

寫生位置

山之皴法之圖

樹之點法之圖

寫意之人物之圖

倭畫漢畫之論

絹幅上幀子法

絹平幅物採年 炭直描様

朽木之存様

畫の描様

繪具之解破

合調繪具之題名

筆墨繪具用法

漢畫獨替古目錄 乾平

漢畫獨替古

乾

惣論



君山宮瓊 著

夫画の西漢のころは是を有形の物とすなり人の
うちより万里の凡煙を寫し一尺寸の中にも千石の峻壁を
形容とすは亦無形の画とすなり音の響をとりて画の氣
韻生命を述ぶるなり是をこれをおまじ不どあり
わらわらとをハ画をとりてこれを補ふはハ画のほじ
わらわらとをハ何なりとてこれを補ふはハのあはハ
行と画とハ隔を同じくすなり 文雅のあらはじあり
後漢の画を學ぶんはあはハ其画をすまふことハ
物中にもあはハすなりやまはハのあはハるは

さらけに筆とさらけと標準とよりあつた拙いありあり
 画を字と人とざらめをいへる画法と規矩もゆるい
 不用唯画の象物の形象をえりくともゆるい純粋の
 心だかかちらあつたものさきら粉中なりとおぼしき山を
 看ていやくを字樹をいへる樹と写あを看りたるを
 写るるを看りたるを写何れも我ららふ物物の
 生物を粉中いへる後而ふ其生物の形象を写す
 写しと自らいへるをいへるをいへるをいへる
 のまをいへるをいへるをいへるをいへるをいへる
 子を練子を練り大抵不敷二三の程も写せられたる
 子を執り純粋いへるをいへるをいへるをいへる

帰りのことありありいへるたよりいへる
 條理も中いへるをいへるは肉骨もこれのつら
 ありありいへる枝葉もいへるをいへる運筆のいへる
 檀まありありいへる而後よき吟巧者の法をいへる
 ありありいへる画をいへるは諸画のいへる画師をいへる
 ありありいへる画法のいへる本林殿ありありいへる
 規の功を積り後いへるをいへる名譽画といへる
 ありありいへる画のいへるをいへる唐山のいへる
 筆の意を描きりやむやむ規矩をいへる画法をいへる
 ありありいへるをいへる唐山のいへる行氣
 建障の画文人顔士の画といへるありありいへる

是らるる人の範圍まわらひの待らるるべからん其
 言ふことばにまはるる人の法は泥んく描きぬが
 唯秋一箇の標準よりいふつゝをこ作してしるるを
 りとわく法をたゞとらふといふ素よりつゝ人の
 名譽人なごうにんの法の所たき 天然自然の画えも衆物
 の表裏結むすばつゝのまはりなく物の性質を頼たのむを
 具理をきとめたるものあり天然自然條理ありて分曉
 するがごとし後の學者其中に純く自然の條理を法と
 して見るものあり其法とてありて法の中小實を
 思おもへ法をきとめぬとていふをたゞ自然條理
 唯我悟われとらを貴く重んずるありたれは画法とて
 画術えいじゆつとて

唯可ただ成なり巧たくまなり人の描えは白しろ親か紹さう言いたる言ことなり
 如ごとくます此こ處ところをたぬ終つひに神かみの病やまよりたゞ
 さいほの人の親紹かようとていひてまゝ画えを
 学まなぶといふはさほむらむら起たりてはいふことなり
 而後しからばさほむらむら鹿柴ろくさい自有すなは法あり可た無く
 無法む法あり亦また可た唯ただ先ま理り筆ひ成なり琢たく研けん鐵てつ如ごとく泥どろとてはたは故ゆに
 百鍊ひやくれん千錘せんすいの功こうをためをきとらしては法ありをたやすとも
 べらといふことなり人ひとをたらしめるともいふことなり

寫生法

花鳥人物山水の寫生をよむるは

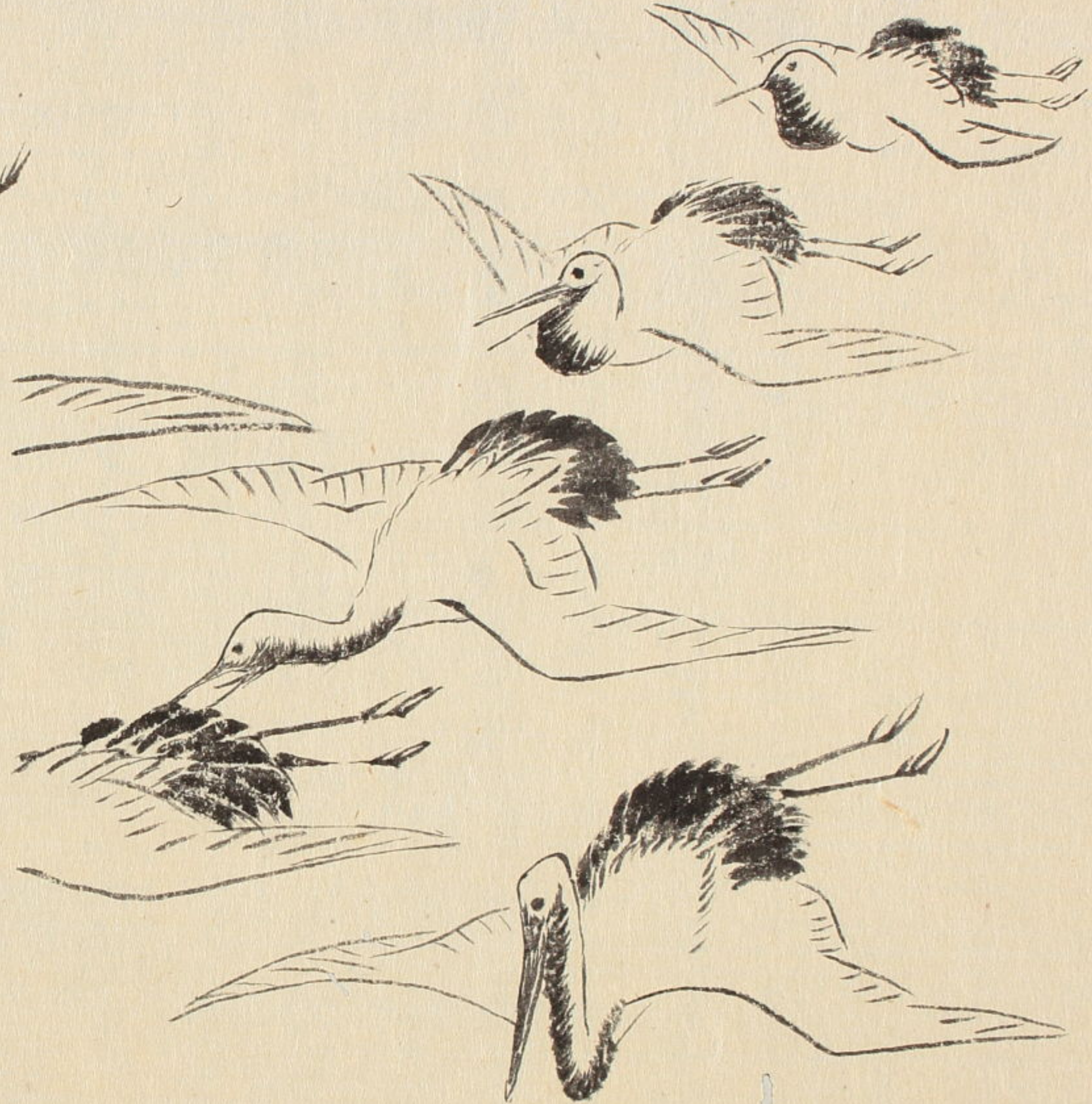
〇るく吾語を
写生せんとなし
も其二枝此
頁を占む

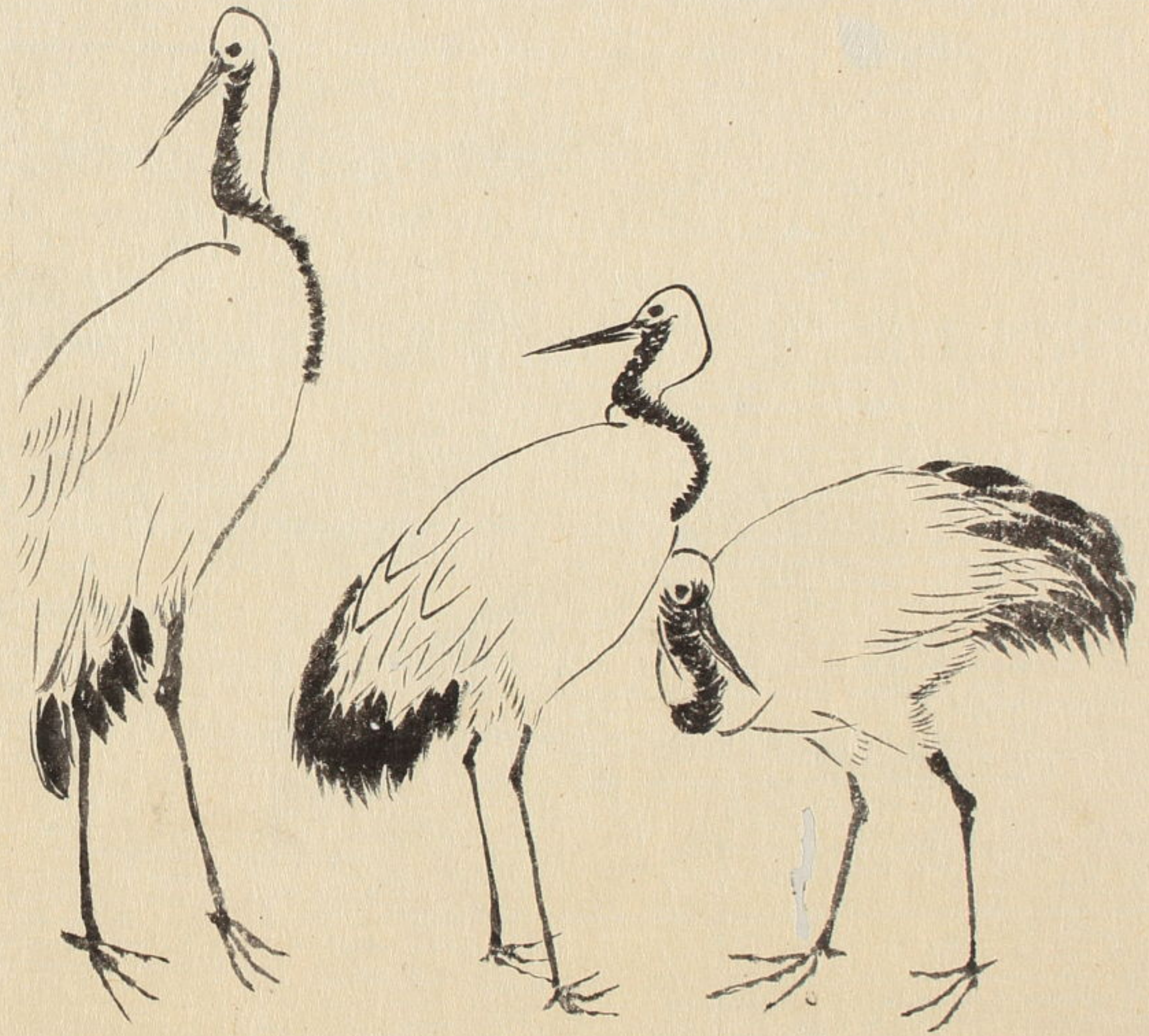
用捨のめく者捨のころと判中のその教圖をとり
るやとまじりあり其目の其一箇の主とまじりあり
を山崖中まの小城たけ泉ありをそそく思ひ是を写生
せんといふく吾城泉をその糸の教圖として位置を記し
写生とあり海濱の津村沖小橋ありたりありひの宮殿
橋閣流水橋探亭峯連山等ふかとのの京の探
て教圖として其糸の糸をいへらしふ由意なり
れとい梅の條に右小葉と一枝小葉いば鳥とりのよまゆを教圖とい
写生とあり其糸の枝えだありけりといふ
あといれとい唯一らしふ判の判をとりその
梅の樹の右といふころたる枝條をいふことごとく

あつたも我写生といふ行要標準のその教圖
の意をうしるるありけり梅の樹の中
いふも其目ありて肝心の由ありけり
いふも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふも写生といふはけりありけり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり
いふもあつたも其糸の糸をいへらしふ由意なり

写生位置

寫意飛鶴
生物の姿を深々ヤラク小
うらまを写意とよ

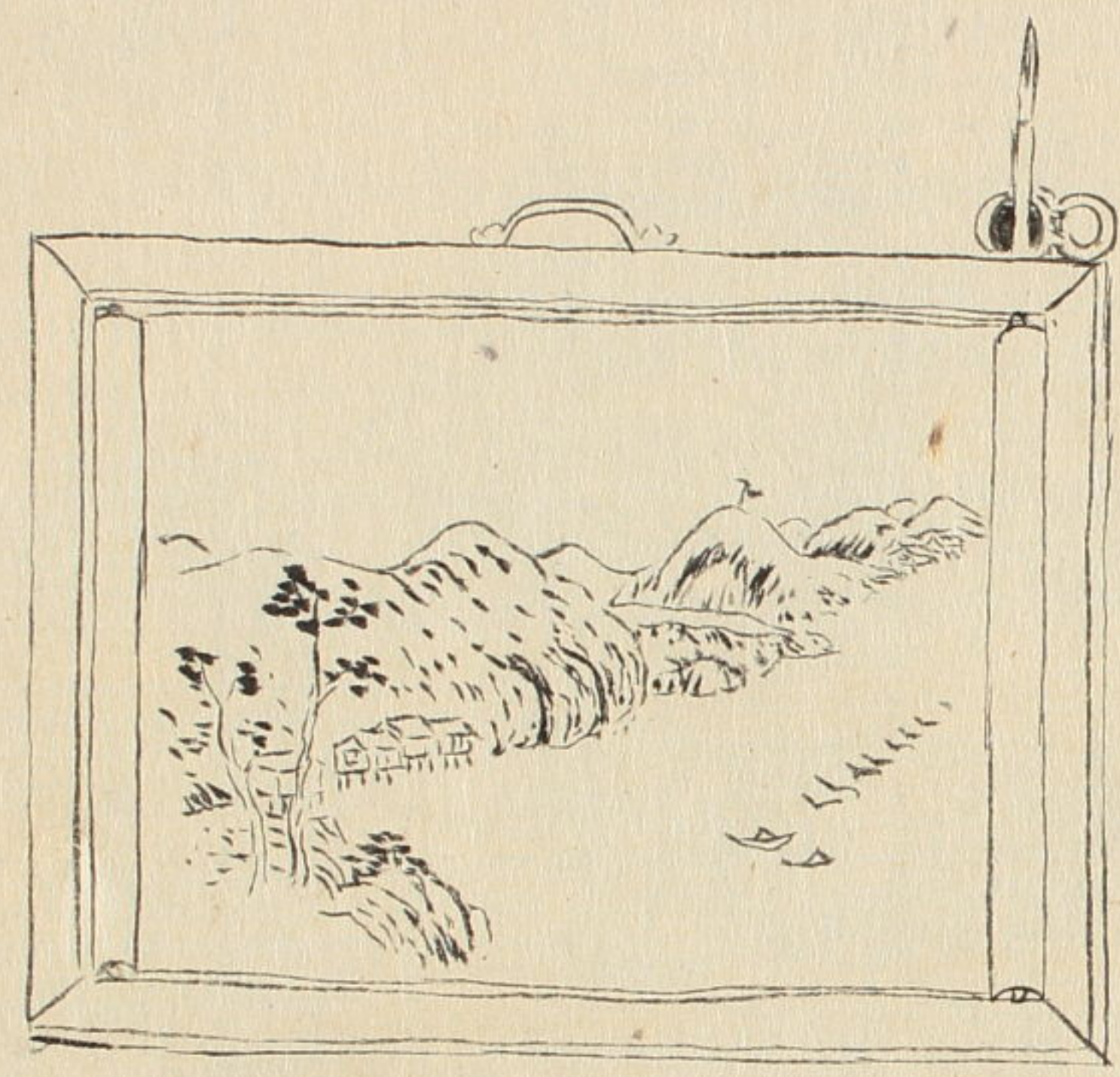




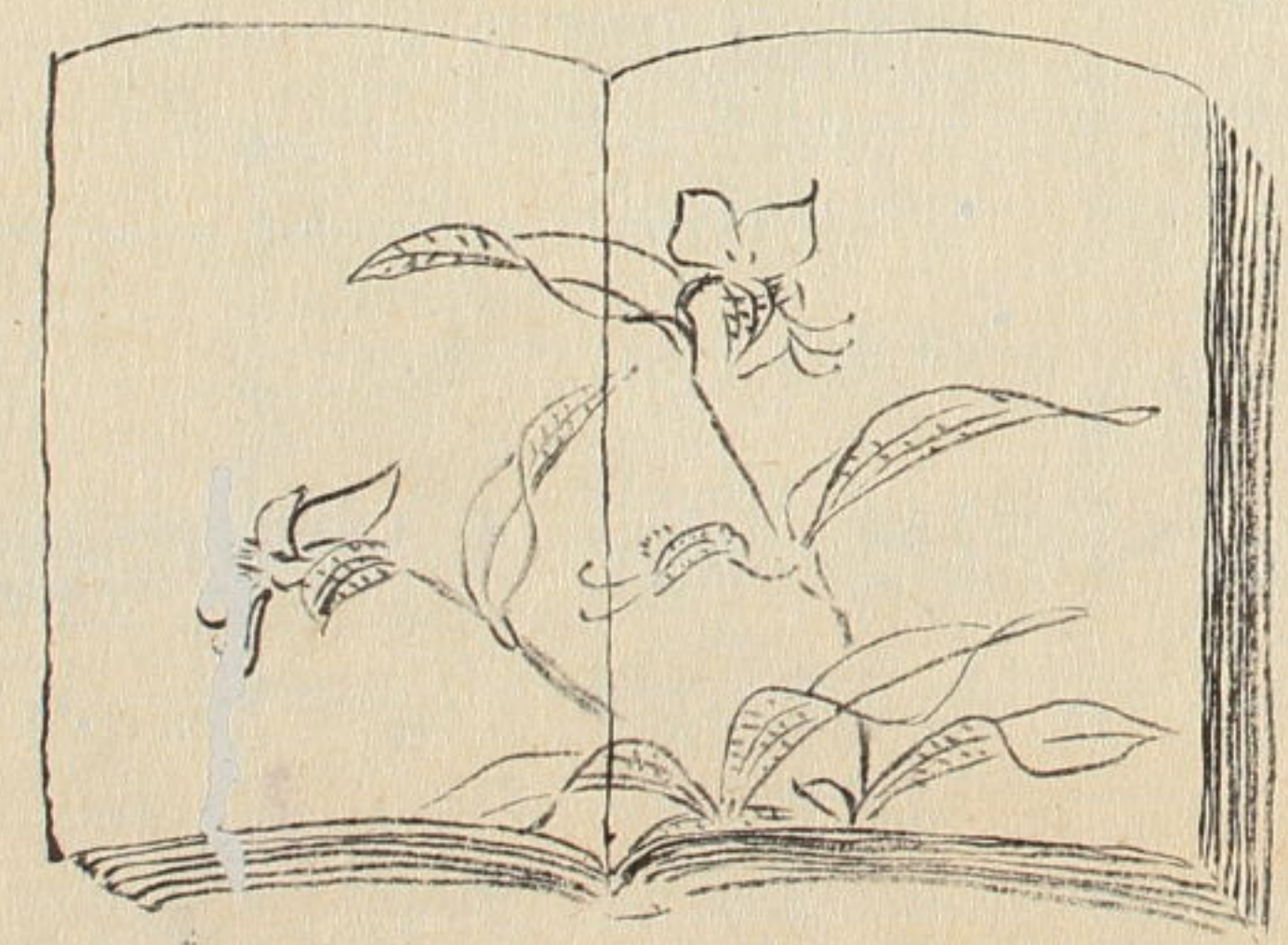
其二

多邊紙ありしは書やあつて家のとらへりたる様
 をはくくして日毎に書ふは時々のとらへりたるのよき
 或は花を寫生せんまじりたる所の紙のよきもの
 一葉の経言をえて其書をかふるは一は枝をわたり
 彼所の花を彼所へ入す枝は書をとりてせしむる根
 めにともを寫し一はかゝるのちのちのちのちのち
 一はけ紙と小布をとりて後書をとりてその
 思案もあつて書せんまじりたる所の音中尾
 翻語してあつて書せんまじりたる所の音中尾
 又去道徑宗をまじりたる所の音中尾
 鴈塘かゝるを寫せしむるもの
 紙を以て山の形を寫

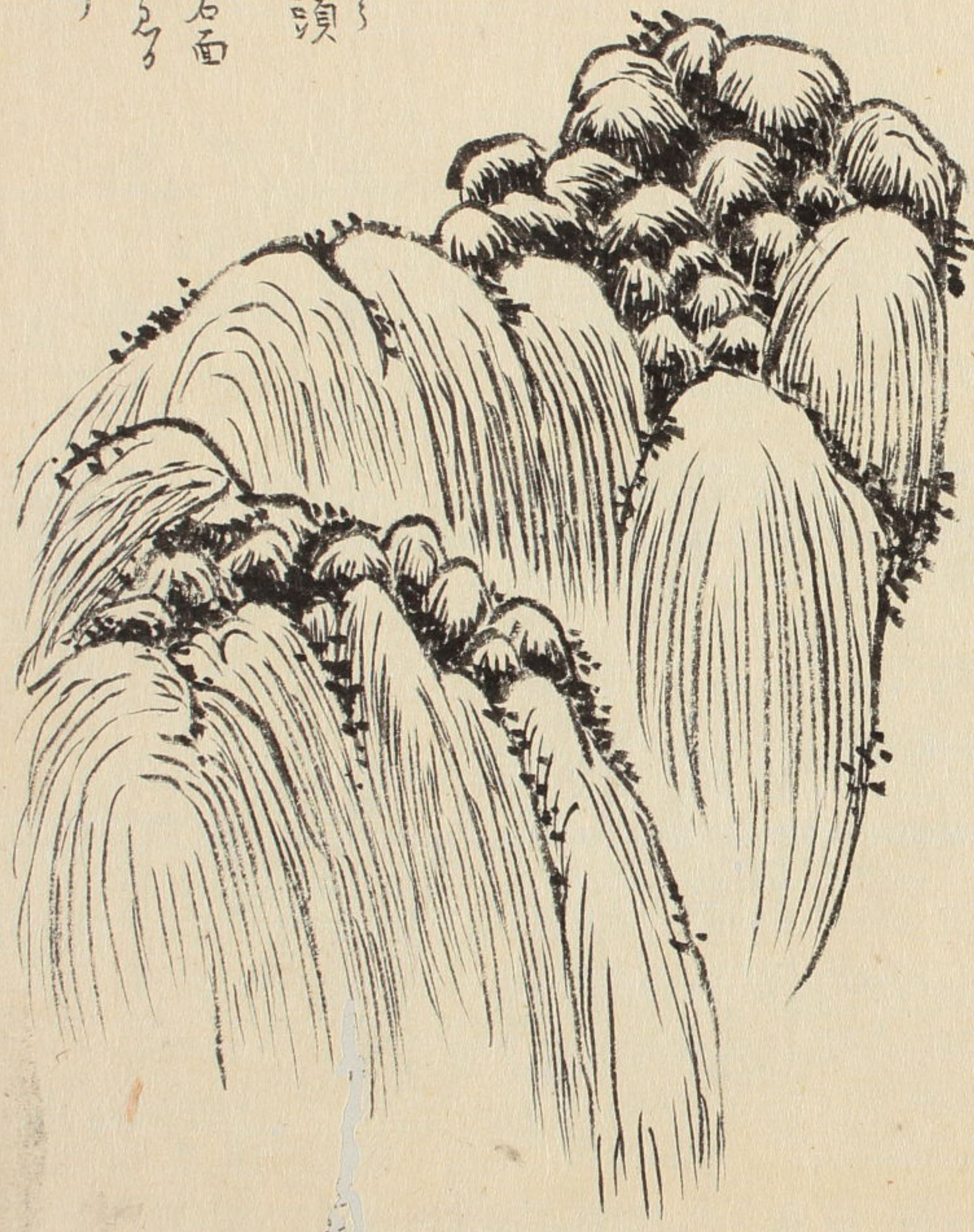
寫生盤圖



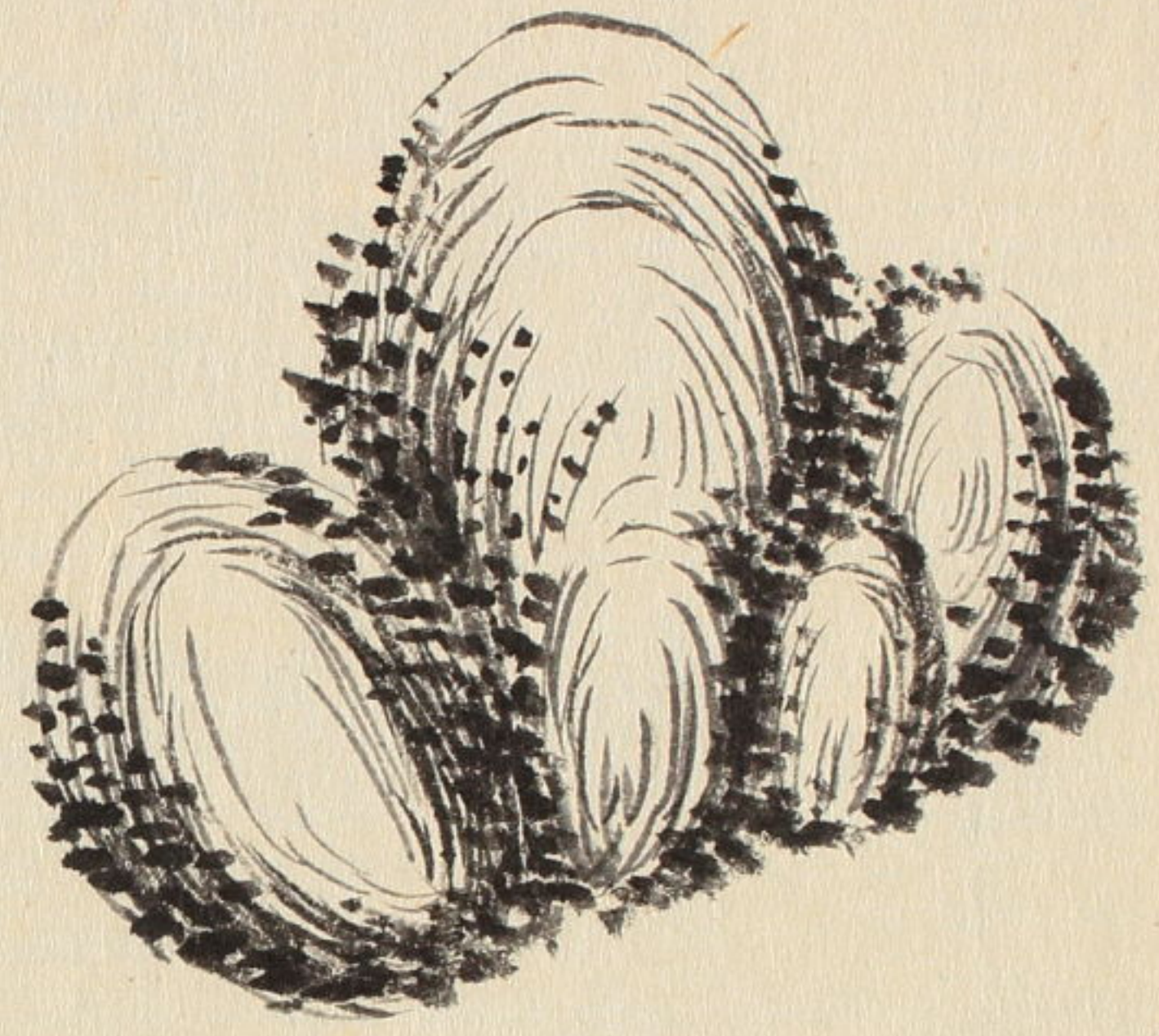
寫生帖圖



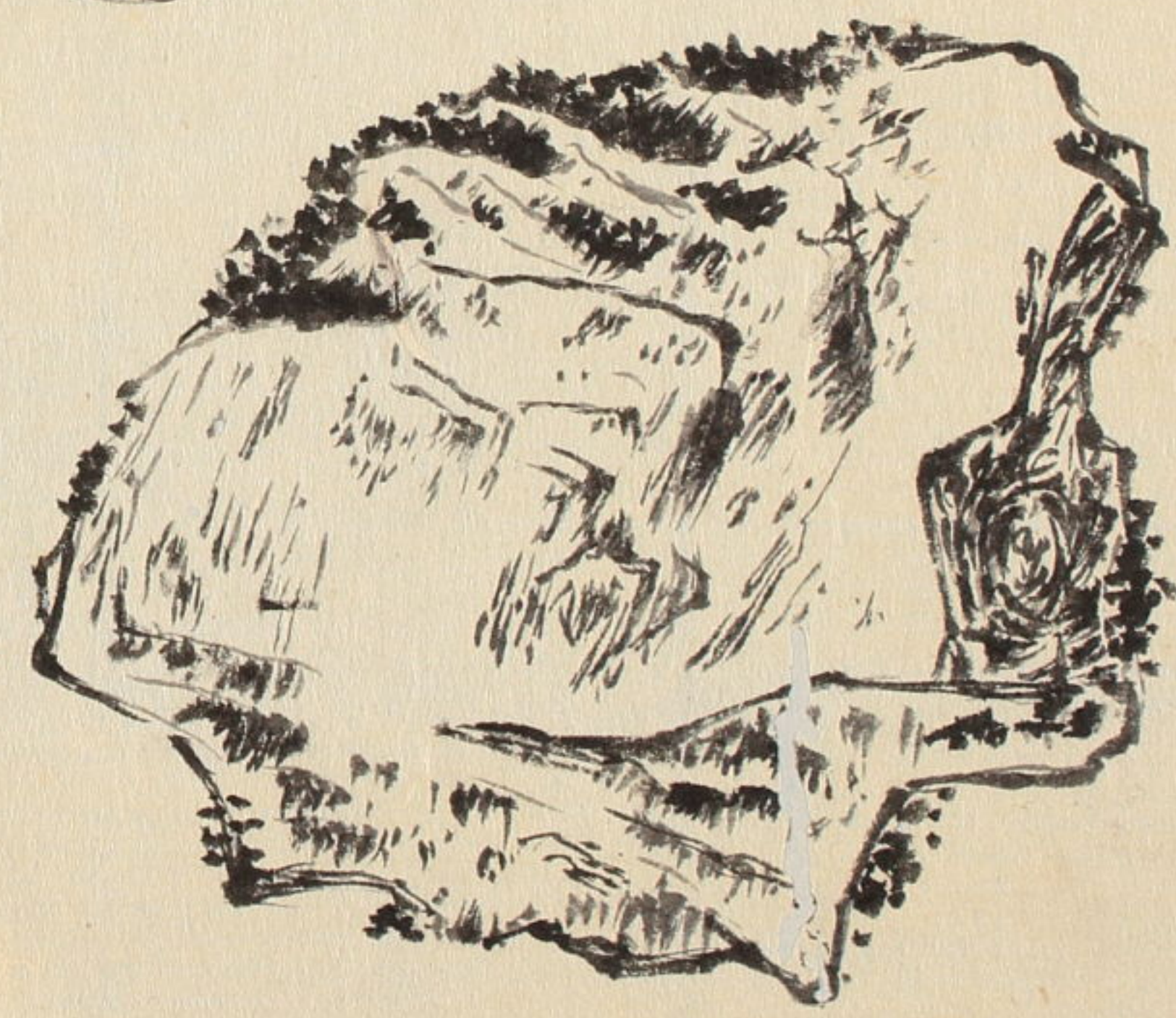
披麻皴巖頭
 山石之正面右面
 左面之三面とも
 なる可なり



解索皴石法



大谷磨石法



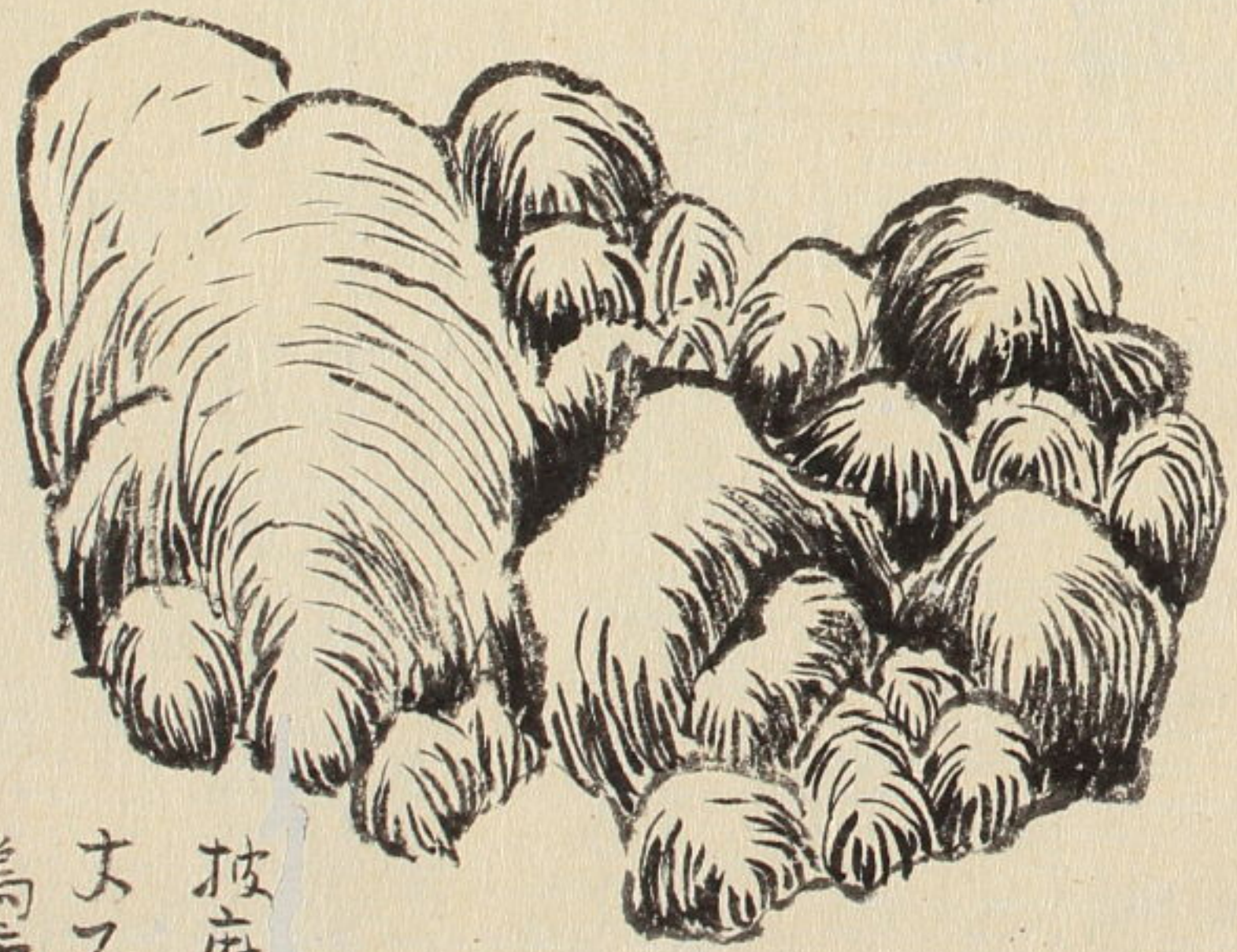
荷葉被露頂

此山を以て凸凹
多きを正のりり
やうかしく新田大を
口とせん



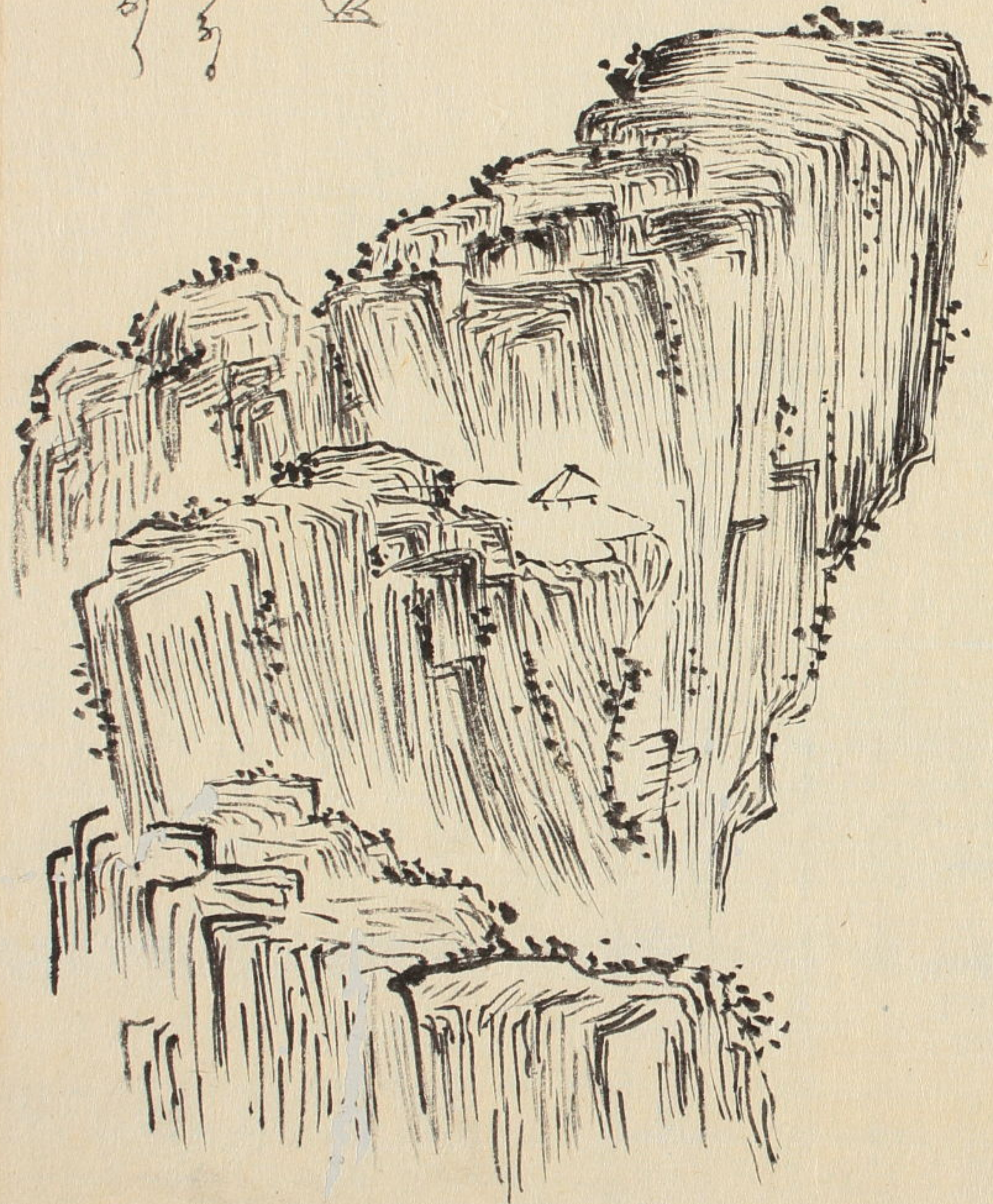
米點露頂

山カ將郭をかきて
點をとりん



披麻被大間小間
大石法山の雨終根
為塘等三四

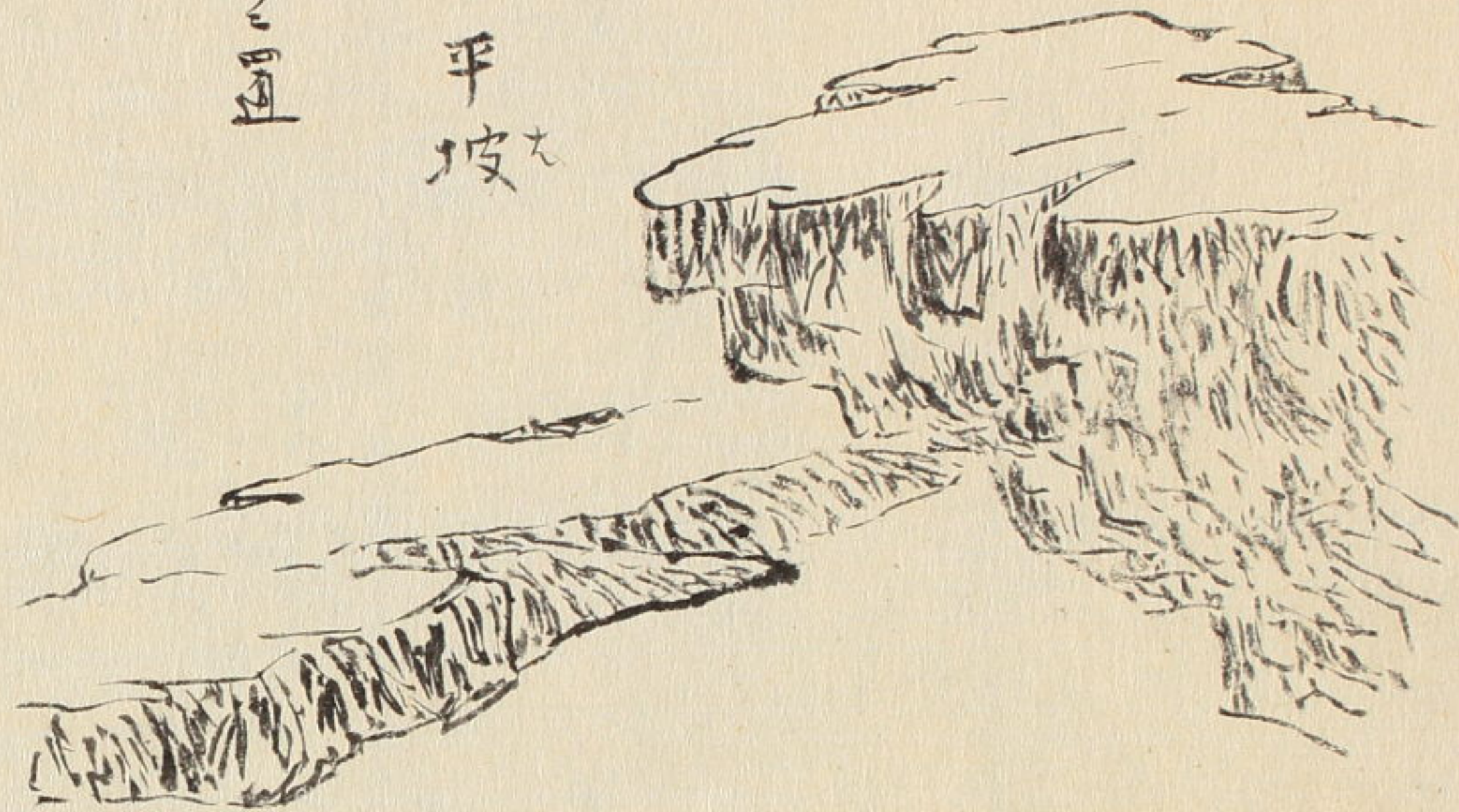
法
折帶皴高遠
多
少
山
皴
法



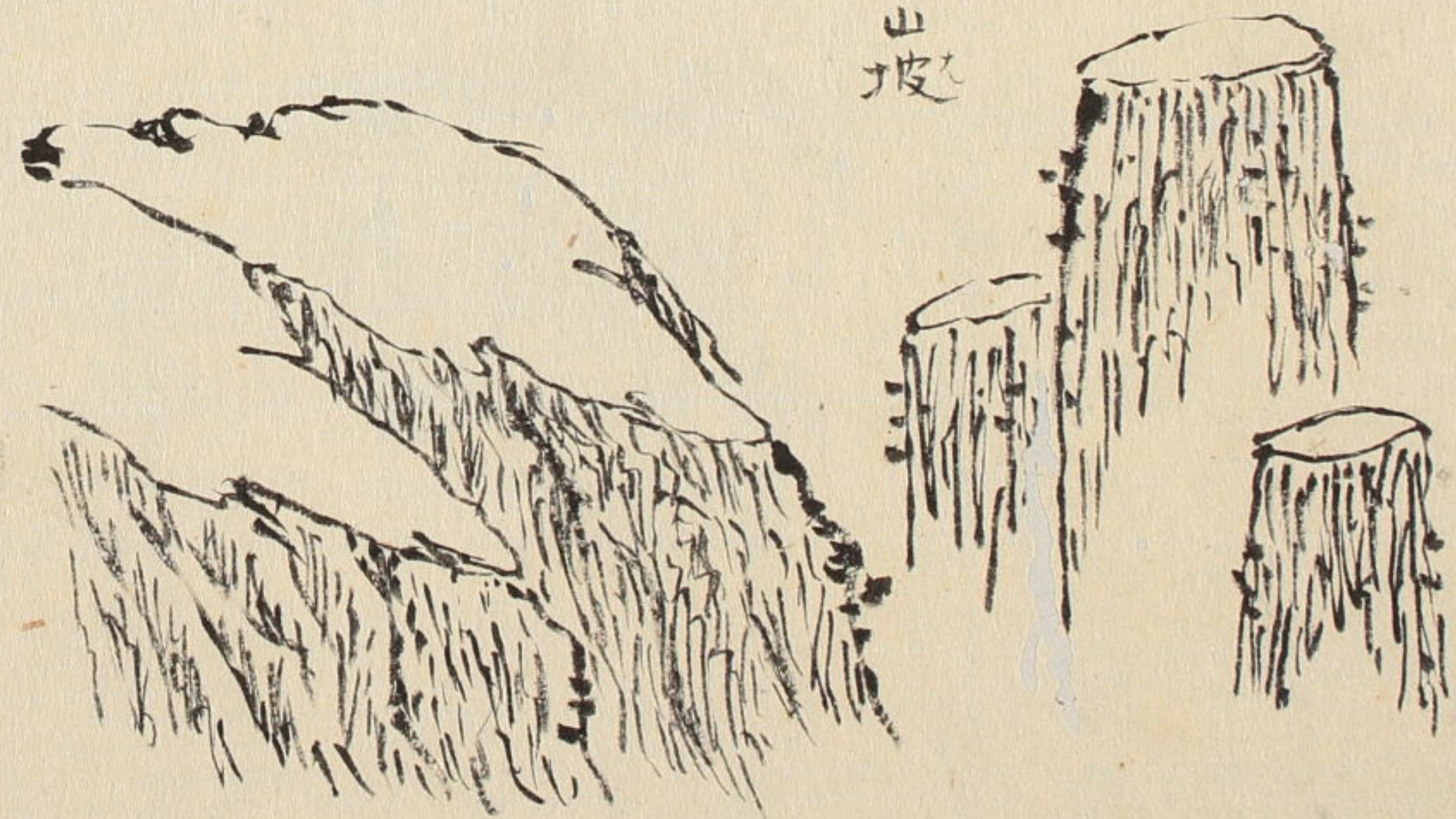
石坡

皆山多之通

平坡


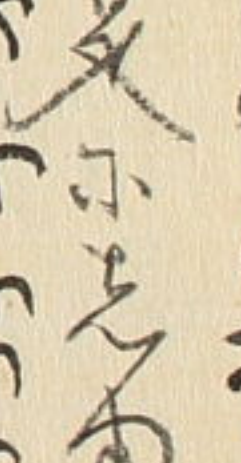

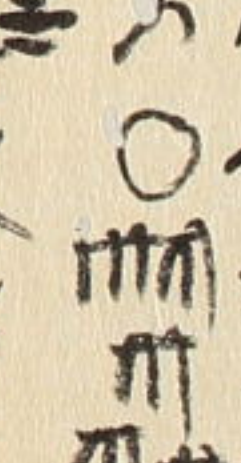

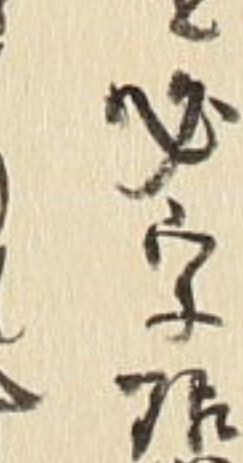
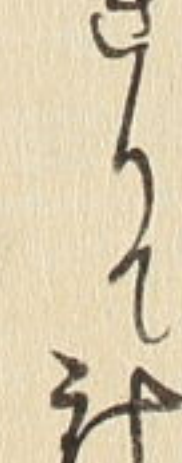

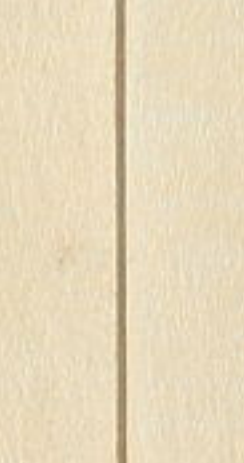

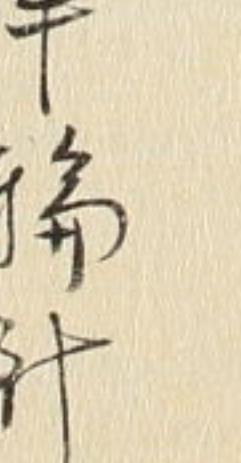




山坡



幹成て海よを點しと正の梅を作しとせん

點法

點ははあましめし其既本畧をあましく和字少なきは
點は別もなきあましめし言のほまう○是を葉
花點としり別本まきしり余りなきは○是を今字
是を胡椒點としり○是を今字
點としり○是を氣足點としり○是を無藤
點としり○是を一字點としり○是を足點としり○
○是を桔桐點としり○是を必字點としり○是を
さそ松葉點としりさそ松の葉かかきしりし汁法とあり

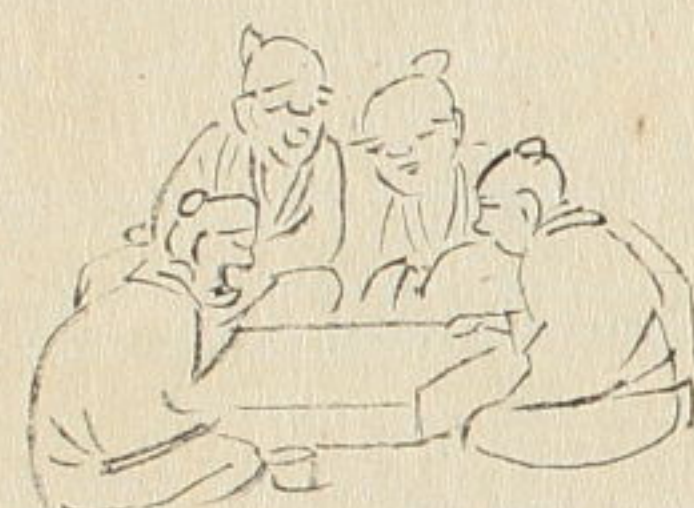
○是を語遠汁としり○米是を車輪汁としりさそり
りさ點は汁なきりさそりさそり無葉用しりさそりさそり
畧とお梅をうりさそりさそりさそり山を寫しりさそりさそり
りさそりさそりさそり何點をとりさそり寫す彼のさそり
何點をとりさそりさそりさそりさそりさそりさそりさそり
りさそりさそり

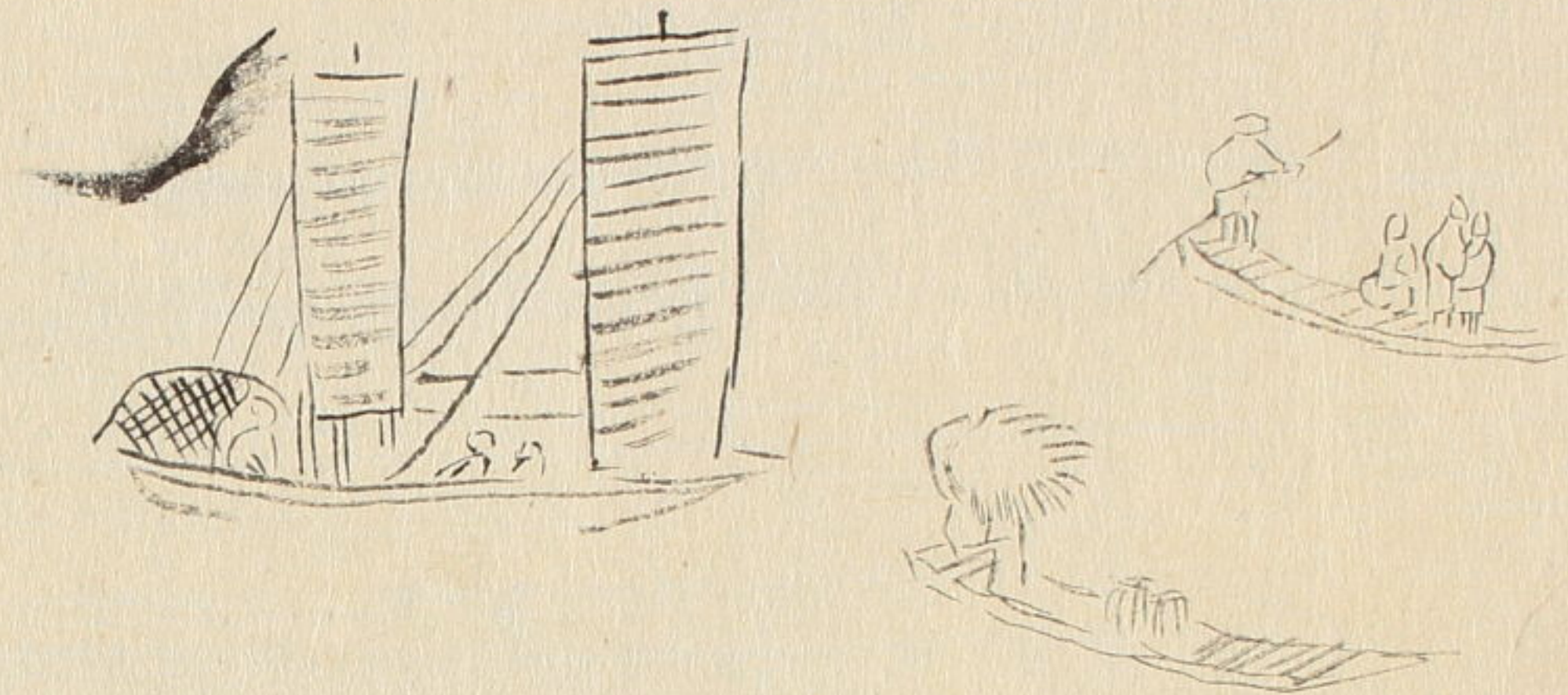
寫意人物

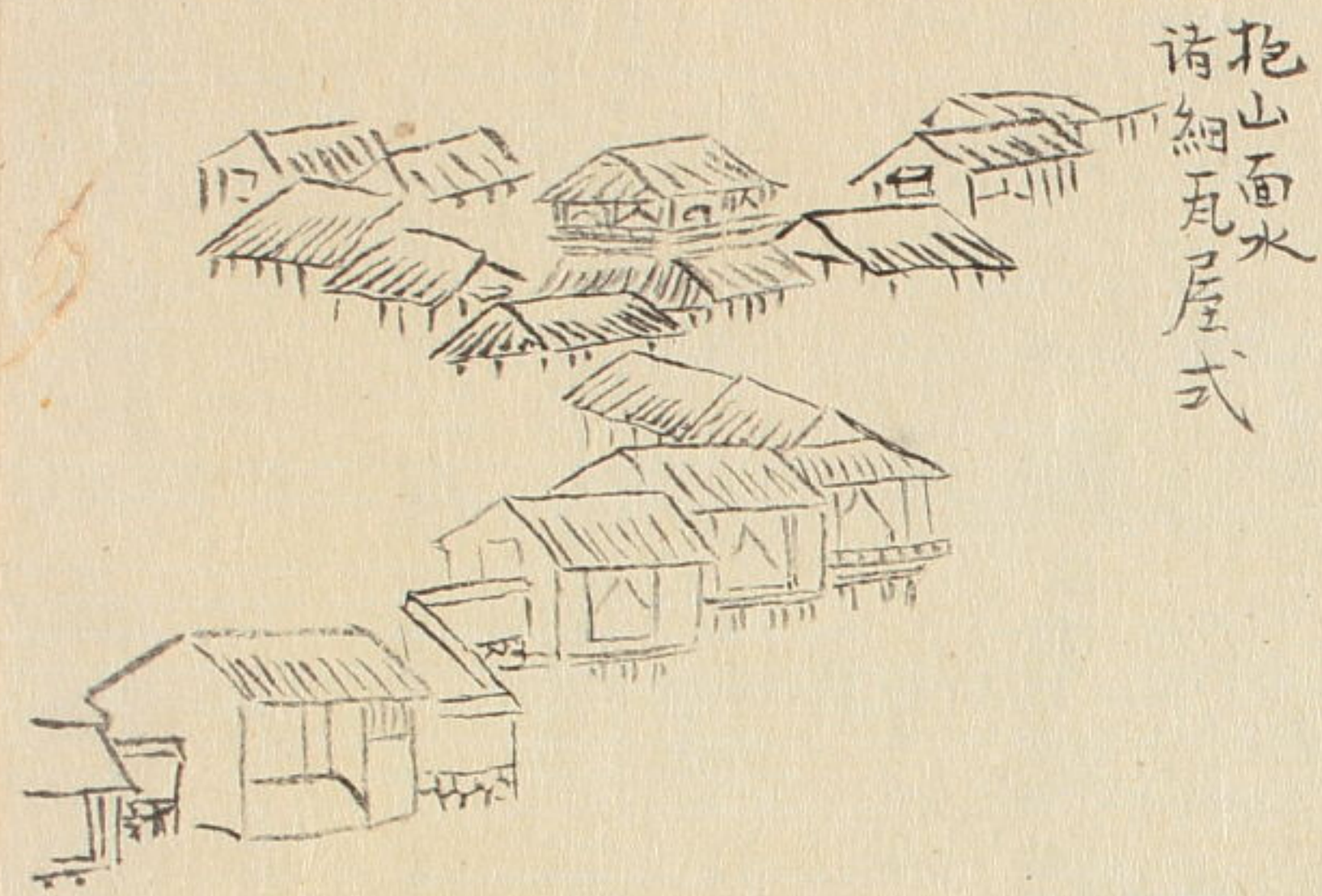
山人の中一はあましめし人物を寫しり人物としりけり人物
さそりさそりさそりさそりさそりさそりさそりさそりさそり
梅す馬と人としりさそりさそりさそりさそりさそりさそりさそり

寫意人物

正百六



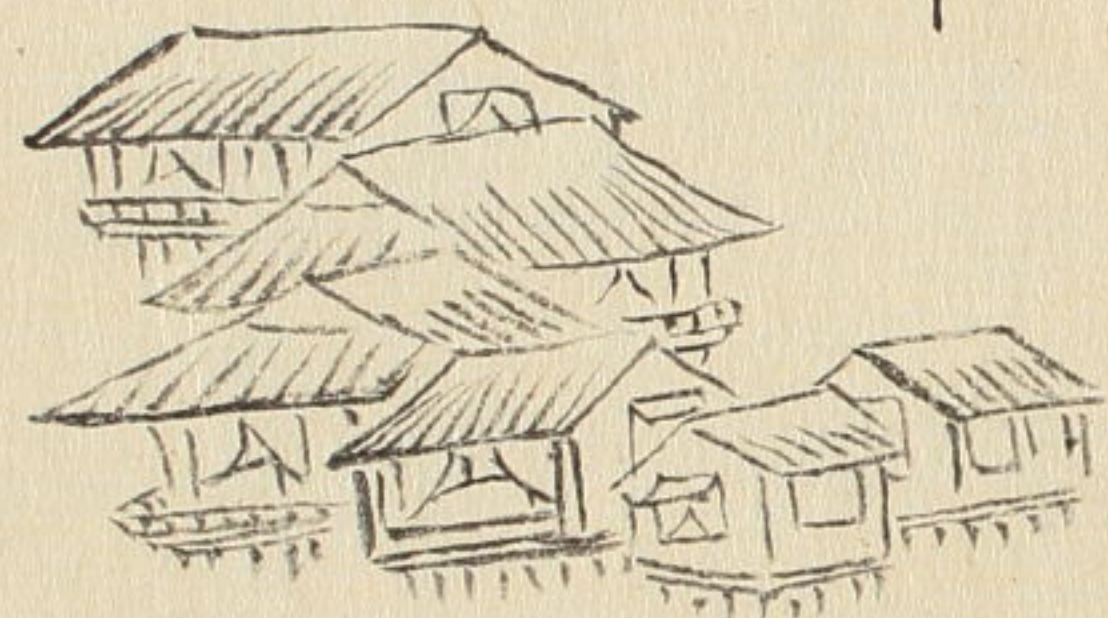




抱山面水
諸細瓦屋式



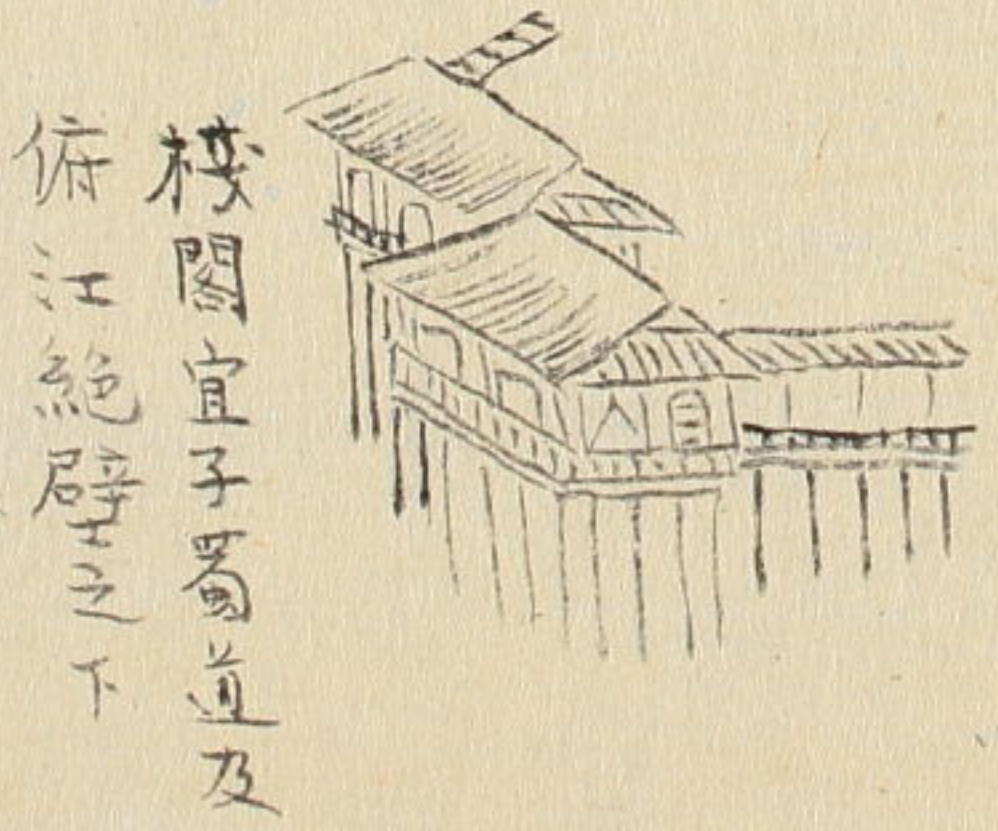
北亭橋式



水陸兩岸
相對面注



石頭林下置
中店



樓閣宜子蜀道及
俯江絕壁之下



孤亭破上置

店居

茅屋

大屋村一置

水閣一置

るふ夏おとの人物の刺人として人々を驚かす法あり其
人物の式はもつあんも異なりたし出
○相山もるもあふふあるやうの寫をせり正面丸面
右面の三面を見らるが法なり唯正面中より見るのみ
るゆるをねりて画の病をもちたり橋ありて道を
くちありて泉原ありて雪道のやまひなりとの
ふゆりの法式またあ敬ふ人の家小書見

倭画漢画論

我邦の古人は大徳漢土の名画を學じておのれ新ま
を養明して一家の法をみせりといふ凡韻なりといやし

周文雪舟の比より起りて信實鳥羽僧正の二子ハ
漢土宋元の名跡を學べりといふ一家の法をみせり法
世に行つたこととて久し可翁明兆及び如拙周文
至て方より精妙を得たり其後又分て三家とせり
曰土佐曰雪舟曰狩野なり土佐は倭画の専門たり
雪舟は漢画の粗筆なり狩野は漢画の倭を畫る
なり名此支流せりといふ又とて久し故名譽
の人と又多し然るも支流世に降人独りて流俗より
引てきたる漢土の法はもつ小をせりなり近來享保室替
の比より又漢画を學者四方に起りて名譽の人若干
安永天明の頃に至てはつと熾しといふ人文は富なり

○狩野元信の名也市郎始大炊頭と称し後御前守
任と祝髪しし永仙と号し法眼位に叙し世小古法眼と称
す曰狩野氏の宗と号するあり其学所の山名馬を麦
珪牧溪玉潤舜華を學じ人物は梁楷顔輝を學じ
花鳥は趙昌を學じ法画は友信守土佐光信の法に
同て其短きを於て長きを云ふ山名人物多矣草木
のつりまけしし妙を學ぶて神と号す支流しし
友相山樂守信あり名人多し

○友系徑隆土佐守に任し從五位下小叙し繪所と号する是
土佐守の元祖有り徑隆の子友系は光の御守に任し
延文元年繪所と号する行光の子友系は光重の御守に

任し明徳元年繪所と号する光重の子友系は廣周の御守
十二年土佐守に任し繪所と号する廣周の子光信は
友系氏の支那あり友系土佐を以て任官を深
くし世に土佐を号して世に光信の右近將監に
任し繪所と号する明徳五年刑部右輔に任
は子孫世に傳はりし土佐土佐守と号す

○僧雪舟の諱は善揚なり備後齋と稱す備中赤濱の
産なり刀初の開山宝福寺の僧なり妙んで畫をよくし寛正
年小大明國に渡り四明天童の号あり一庵と号する雪舟
云我人小大明國にあらずと云ふ道通は松竹の師と号す
年一唯明國の名勝の地あり山川草木是我なりと号す

我小あつる人ふ求ことありとらん大明の君臣昔も其美
を祚と朝よりうけて後周防山口雲谷寺中居す雲谷新
と号す山名を吾も人知を次とて花多をすこその次とす
らん別長谷川家の祖より漢土の画風よすくか多しは支
既も名譽の人多し一ちんく世の人の志るもあか
れがあげてけ條かせせと

○漢画小南宗北宋よりふとあり南宗とりあつる世ふ云文人
の画は是禪宗より比して唐朝は一あつる宗を分り
南宗の祖は唐の王摩詰より一を画くより一は渲淡とも
渲淡と云刷毛もすくはれりともく画事より一を思ふも
再三擗てこれを洒をふまき一幹淡ともいひて條法を

何遍條法ともを跡をわくともやうふとを南宗の祖
とも近日本我國よりして大雅堂無名は法を判ひく人の
世ふもりよりす北宗ともいひる世ふりの画工の画より
中宗の祖は唐の李思訓より一は宋の趙幹趙伯駒
馬を夏彦之いひる是の画の門より一は神中
象形よりものを画がくとも一は近世我邦中法
を用ひる胡王玉鑿より一は可るを
しして生物の意を留むを可説とも可生と云ふ形似
いかに意のすく多しやふとをやく可るを云ふなり

絹幅上幀子法

絹^{きぬ}糸^{いと}画^ゑを^をき^きふ^ふま^まつ^つ幞^{ふく}子^こを^をほ^ほく^く其^{その}幞^{ふく}子^こ糸^{いと}續^つを^を靴^{くつ}
 糸^{いと}張^はりて^て猫^{ねこ}ぢ^ぢり^り幞^{ふく}子^この^の作^しり^りま^まつ^つ小^こ捨^す木^ぎ板^{いた}の^のあ^あり^りま^まつ^つ言^{こと}言^{こと}考^{こう}
 ま^まつ^つる^るる^るる^るを^を幅^{はち}糸^{いと}作^しり^りま^まつ^つこ^こ一^{いち}ら^らう^う天^{てん}地^ちと^と左^さ右^{ぎやう}あ^あり^り
 平^{へい}ら^らふ^ふる^るる^るや^やう^う小^こ指^{さし}し^しま^まあ^あら^らし^し絹^{きぬ}の^の幅^{はち}も^もう^う天^{てん}地^ちと^と左^さ右^{ぎやう}
 ろ^ろま^まに^に一^{いち}ま^まつ^つお^おつ^つせ^せま^まく^く幅^{はち}幞^{ふく}子^こを^を作^しり^りま^まつ^つれ^れと^と縮^{ちぢ}横^{よこ}
 幅^{はち}三^{さん}尺^{せき}は^は五^ご尺^{せき}大^{だい}ぢ^ぢり^りあ^あれ^れと^と幞^{ふく}子^この^の内^{うち}法^{ぽう}に^に狭^{せま}幅^{はち}を^を大^{だい}九^く寸^{すん}堅^{かた}
 の^のゆ^ゆも^もう^うく^くう^うす^すま^まは^はほ^ほく^くる^るを^をう^う絹^{きぬ}の^の望^{もち}望^{もち}板^{いた}の^のま^ます^すの^の余^{あま}けん^{けん}
 い^い指^{さし}を^を張^はり^り時^{とき}の^の形^{かたち}或^{ある}々^々り^りぬ^ぬ指^{さし}と^と裏^{うら}表^{あへ}の^のま^ます^すか^かつ^つか^かつ^つの^の
 ま^まり^り足^{あし}を^をも^もま^まふ^ふあ^ある^るま^まの^の櫛^{くし}と^とを^をも^もま^まふ^ふる^る目^め孔^{こう}の^のま^ます^すか^かつ^つか^かつ^つ
 出^でて^てら^らる^る方^{かた}の^の表^{あへ}も^もう^う天^{てん}地^ちと^と左^さ右^{ぎやう}あ^あり^り張^はり^りま^まの^のあ^あれ^れは^は
 どう^{どう}改^{かへ}厚^{あつ}の^の厚^{あつ}を^をよ^よく^くま^まう^うほ^ほく^く一^{いち}張^はり^りて^て篋^{けつ}子^こを^を以^{もつ}て

の乾

て^てむ^むく^くの^のち^ちも^もや^やう^う小^こ幞^{ふく}子^こも^もぬ^ぬり^り甘^{あま}幞^{ふく}子^こを^をハ^ハ壁^{かべ}ま^また^たて^てか^かけ^け
 ま^まり^り上^{うへ}の^の櫛^{くし}を^をも^もま^まふ^ふ張^はり^りま^まの^のあ^あれ^れと^と小^こ一^{いち}張^はり^りを^をう^うた^たげ^げ
 糸^{いと}を^を幞^{ふく}子^こに^にま^まけ^けと^とい^い右^{みぎ}左^{ひだり}と^とま^ます^す一^{いち}張^はり^りを^をう^うた^たげ^げ
 指^{さし}を^をも^もま^まふ^ふ又^{また}あ^あり^りぬ^ぬ糸^{いと}を^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り
 一^{いち}ら^らう^うの^の幞^{ふく}子^この^のま^ます^すの^のま^ます^すを^をけ^けら^ら乾^{かわ}て^て糸^{いと}一^{いち}ら^らう^うに^にま^ます^す
 う^うぬ^ぬあ^あり^りぬ^ぬま^ます^すの^のま^ます^すの^のあ^あみ^み糸^{いと}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り
 こ^{この}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り足^{あし}を^を止^{とど}め^め縮^{ちぢ}る^る
 を^をも^もま^まふ^ふ糸^{いと}の^の幞^{ふく}子^この^のま^ます^すの^のま^ます^すを^をも^もま^まふ^ふ出^でて^て糸^{いと}一^{いち}ら^らう^うに^にま^ます^す
 一^{いち}ら^らう^うの^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り糸^{いと}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り
 両^{りやう}様^{やう}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り糸^{いと}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り
 う^うぬ^ぬあ^あり^りぬ^ぬま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り糸^{いと}の^のま^ます^すの^のあ^あみ^みを^をほ^ほけ^けて^てハ^ハま^まる^るあ^あり^り

わさびをこきくきくきく西を——社統こきくきく

絹車横柄の糸は道標

絹車——小機法をひく絹を頓子と云ふる物のかか
を待て上り横柄をいよこさして糊の舟をる所を
刷毛と絹の長うひきて乾たるを又裏より上て床下
平小を乾かす——洗物をひく小頓子を置く置上
を洗染り——いんせきと云ふ物と云ふ所とありて
夏月——○機法は夏月より水を糸小生機
冬月より生機ニ録阿膠四録より春秋は寒熱の強弱
糸——夏冬より糸を——以上機法

絹粘頓子
機法個名



髹法より髹法は桐杵の別線よのめ傾上髹法乾き
 画を上す其絹の幅より小更濃紙を粘してはが合せ
 画うんと和りの人物山を花多にかぎりて何れと下画の
 位置をしくてよく其格好をえ人を位置を成て是を
 傾子の下よとて傾子の表より陰を炭筆を以て
 絹の表より炭道しくて傾子の下に敷置し下画を以て
 とりの下画に

漢漿調法

渡紙画紙紙鳥の子等の紙に髹法よりふは時候り和干
 候て割藪ありたり雨天日は天日と東風南風の吹日

絹本布置
 炭道
 炭道



不成へう寸は日ハ糞法と紙ハ雨濕の氣をふくこ
て画を上^し畫時ハ條^して筆^し掃^しこめりて墨^し彩^しとふきを
失^しふことあり唯晴天の日をえんてと^し又晴天よと
黄昏時ハいとく^しば黄昏とんば日氣^し中^しハ氣^し
乾^しく故^しよき^しむく有^して大^し悪^しし^し麦^し日^しハ陽氣^しを
つよき^しん^し膠^しを^し陽氣^しの^し強^しき^し小^しお^しく^しれて^し後^し染^し利^し
ぬ^し朝^し未^し明^しの^し比^しより^し洞^しへ^しけ^しく^し朝^しの^し涼^しき^し風^し小^し乾^し
べ^しぬ^し糞^し法^しハ^し宿^し家^しハ^し得^し意^しあ^しく^して^し一^し定^しと^しく^し唐^し山^しの^し法^し
諸^し書^しの^しく^した^しも^し皆^し相^し違^しあ^しり^して^し一^し言^し小^し用^しひ^しこ^し今^し
ら^し小^し記^しの^し糞^し法^しハ^し余^しガ^し年^し未^し試^し得^しま^した^し法^しの^しま^し法^し
紙^しの^し糞^し法^しハ^し五月^しハ^し晒^し阿^し膠^しハ^し十^し五^し糞^しハ^し冬^し月^しハ^し阿^し膠^し

十糞 生糞 ハ糞 春秋ハ寒暖の強弱ハ意を反冬^しの分量を
以^して^しを^しし^しを^しし^し画^し糞^し紙^しハ^し大^し壁^し紙^し等^し海^し紙^しの^し糞^し法^しと^し同^し
鳥^しの子^し紙^しハ^し阿^し膠^しハ^し十^し糞^し 生糞^しハ^し十^し糞^し 又^し又^し濃^し紙^しハ^し紙^し下^し約^し紙^し
よ^し阿^し膠^しハ^し十^し糞^し 生糞^しハ^し十^し糞^し 又^し又^し濃^し紙^しハ^し紙^し下^し約^し紙^し
若^し土^し福^しの中^しハ^し清^しら^しを^し外^しへ^して^し又^し阿^し膠^しを^し入^して^し炭^し火^しの上^しに^し
ひ^しく^し暫^し時^しハ^し煎^しく^し竹^し管^しを^し土^し福^しの中^しに^し入^して^しよ^しく^し
解^して^しか^しき^しり^し掃^しく^しら^しの^しを^し押^しく^して^し土^し福^しを^し火^しの上^しに^し
ね^しろ^しし^しを^しし^しを^しし^し阿^し膠^しを^し煮^しく^して^し火^し勢^し弱^しれ^して^しま^し
ら^しく^し解^しく^して^しよ^しく^し阿^し膠^しの^し氣^し弱^しく^し阿^し膠^しを^し弱^しく^し
紙^し上^しに^しよ^しく^し又^し又^し火^し勢^しを^し強^しく^して^し阿^し膠^しを^し強^しく^し
の^しる^し火^し勢^し弱^しく^して^し土^し福^しの中^しに^し阿^し膠^しを^し煮^しく^し

生漆を細末と冷水に放ちて熱湯の中に入れて
 竹管を以て毎くまをよくまきしと柄杓を別の器物
 にかけてよりうろうろしたる泡のぬきを去りて用いたる所
 いろ尻のぬきをぬき申さるる。○漬ぬきをよすか序より
 毛籠をまき其毛せんの上へ紙をのびろげをまき漆ぬ
 を刷毛よきいしして吉ふたたくと刷毛屋漏痕
 ぬきやうし二層をけのゆきなるぬき二層
 子上をいよせ紙をまきろくと美しきぬき熱合せぬき
 ぬき毛籠の上へ錦いろけく乾かすなり

朽筆
ヤキ
せん

朽筆炭木より倍焼かすことろやうに楕圓式
 槍木の古き朽て生木の枝の中を焼て炭とし用ゆ
 若し朽木の之は時々鋼鍋かを貯りて生木をよき意
 あくを去る日は乾し焼て炭よきなりぬ筆の炭のよき
 年の先を三修はほくり炭は限をのこして焼たる炭をい
 のしよきふかじけがり炭の先よきと限し一丸うご
 かぬやうかして用ゆ炭の先を筆のよきのことろ
 けはくろぬきなり

画上法

信染をしる紙を熟きも楕圓よりなるうけ熱紙は画を

描ふ紙張は張せて描きりまづ其紙の裏より一面を
 水を引去るの四方の四角は粘をほり紙のよめを紙に乾
 かしこして平紙なりよめを待て紙をよめをとりま
 紙の製やいふまの骨より大くゆる紙粘を紙に
 張て其上に生紙を二三本も引りておれし紙に
 紙を張るよりおれし紙に紙を張るよりおれし紙に

画彩具

顔色の調度ある事あること諸書小見くは是を委細く記せば
 何事かことわく事あるは其近く用申の画彩の調度を記せば
 書きしものハ只む思ふ事あるを記して初學のしめしめある事

辛を待つ口受とて

金青

一名 石青共云俗に紐青と云

空青

一名 曾青と云俗に靑と云

白青

一名 魚目と云俗に白粉と云

石緑

一名 頭綠又臨名青と云俗に青と云

枝條緑

一名 官緑俗に青三番と云

高三緑

俗に青三番と云

白緑

俗にあり

添緑

俗に岩緑青と云俗に青と云

龍花

俗に龍花と云

螺青

俗に青若と云

浪朱

朱の好品を云

丹

俗に丹と云俗に丹と云

猩胭脂

俗に猩胭脂と云

雌黄

俗に雌黄と云

土黄

雄黄 一名鷄冠石とよ

白土

胡粉 好言を面粉とよ

丁子

藤黄

煙墨

アラビヤコン

紫花 一名燕支とよ

檀子

代赭石

紅粉 俗云白粉とよ

槐花

紫土

雲母

カステカウル

ペレスフルー

皂角子

明礬

浪粉

洞粉

コールド

何膠

金粉

金泥

浪泥

合調彩具題名

緋紅

草綠

老綠

柏綠

秋茶褐	葱白褐	藕絲褐	粉黃	檀褐	艾褐	柳綠	玉紅
棗子褐	棠梨褐	湖水褐	硃子褐	月下白	鹿香褐	荊褐	嫩綠
鼠毛褐	駝色	磚褐	拍牛褐	浪褐	鴨綠	茶褐	桃紅
油裏墨	鴉青	露褐	柳黃	山岩褐	鷹背	官綠	黑綠

藍青	葡萄褐	番皮	皂靴	蘆花褐	栗子褐
不老紅	丁香褐	鹿胎	紫褐	湖濤色	淡青
玉色	杏子絨	水獺	松木支梓	赭黃	朽褐
金黃	篋後	牙笏	金絲柘	肉紅	

胡粉

胡粉は薬味あり細中好ぶるる面粉傳粉天人面
 粉の皮を中ゆり乳滓の中へ粉を入乳根しとけ
 るとよく極細末とて終るを一滴に点してり又
 まり漸くやりくふ乳てあること千遍通ひつりく
 候子のまじりて乳滓の中へいりふも亦付てある
 是を解きありとけり土隔し清水をたくりて火中
 上げ熱湯す其中へ火候子練を其まし投入て皆
 けりともと胡粉より加へて終るを去りて土隔を
 くりとりて熱湯を流し棄て胡粉は元のまじり水死し
 候子の中へ晒しかきりて再びかわりて終る水を
 けりて皆きりてとてかふるり○淡粉との

丹青えのくも胡粉をきりて加へて着色し丸いひと
 きりてつらつらなるものなりとて清の丹青は胡粉
 を加へたつらを通しとて具とて小粒花は胡粉をくまら
 をあいの具とて小脂と胡粉をくまらとて小脂を脂の具
 とりふり其餘皆足小集りて知るて胡粉別り一様
 あり江粉とも別白粉の極めを終るありものを礎子
 の中へ小麻あし擦り終るを加えて花のまじりてを掃り
 細きすくのびりすのまじりて小麻を掃りてあり
 色をまじりて色出るお小粒花よりまじりて別白粉白
 土等の別白はあり皆胡粉のまじりてとて山やま堆たい昔せき脂し
 胡粉も丹青練りれをまじりて物とて小粒花よりまじりて

猪石の乳をとて水浴見ると是は画家の通言なり
何れも粉物よりかきしに膠をを加く用也

靛花

靛花は粒藍あざ根青こゝろ種々あり物中根靛花乃其
外は用をなさん根靛花の好雨をこらうるは福なり其
根は青翠の中は紅子のうらたを好雨と云ふ
用ひやうは礫子ふるをいせて靛花を命命一色に
あせをき一灰けは毒のあといふものをいせし水
うらう恵けのそらをまうる葉子は膠を煮て力の入
ぬやうにしうくと魔まなり終るは淡きを以てとれ

水と靛花とをなうて用ひらむとせし膠を漆を
以てとて時々顔かほをなすはふるに丸くはあめの下
別は〇カステリウルペレンスプルー〇の花あり
皆葉の程より密園の産なりペレンスプルーといふ
則高詩たかしなりけ邦をいペレンといふなり其色もつ
うらうらうと云ふやうなるものなり保膠水と和せし
胡こふれいやく口校めり

雌黄
草緑 老緑

雌黄と靛花をなすは草緑と老緑とを草汁と云ふ
すい雌黄は子靛花をなすは老緑と云ふ

石綿頭條より小岩綿青より散末あり粒綿青頭條
青等あり其中小粒石綿の介り用いし石綿の中より
頭條條一層よりを質堅く亮し及ぶ散末ありとを用
ひやうに礫より細くを折りて扱えしとて用ひ
條青をわくしとて五たじ（かきか）濃淡をまろしとすなり
を得あり

漆緑

漆緑頭條より（かきか）子のつを云あり用ひ頭條より

枝條緑

枝條緑官緑より俗青ニ多しなり頭條より
質微細しとてきうきうとくはりなりとす
用ひぬ珠の品より地をぬれをえしとて中へ
用ひやうの頭條より

高三緑

高三緑俗青ニ番より枝條緑より質又微細し
色もきく唐くうとて用ひやう頭條より

白緑

白緑の言はれより質微細しと色もきく唐く

け白保少あるあり白保の項よりまゝの色を白二番
まゝ其色を白三番とらふけ一番二番とらふはぬ保
跡あるをとりて名もあらん唯色の濃淡の次を
とり余に準じて白一と名にせしむるべし

黄緑

黄緑は古にまゝのものあり近年其製法を得たり
すも用や破石と名にせしむる事あり其石
係と目しはむる事あり

代赭石

赭黄

代赭石は質をまゝに色黄赤色とて人物を
肉色と看してより好而跡あり近年は邦諸家より
其石の色をまゝに色を上品とて色を
織のまゝに用ひたり東より用ひたり礫を
を入る力のつぬやうに物に乾し
用く時を清くを懸し指先とて用ひ
是の地をまゝに小摺を
の肉色等も看して

コールト

コールトは紅毛國の産物とてコールトとて別當語と

近來の米船の阿蘭陀積米の者、昔時阿蘭陀船
積米と云ふものありしを、は邦の画を以てしめしめり
ことをとらざるやえ、積米のニールトを、陸
浦の浪に投げ、帰りと、彼地の老人の物より
ありし、くさ布の沙丁もの時、泥中より拾得
ことあり、第陸浦の地、こゝ稲佐の昔の門を
の浪の泥中より、終に、三四を拾ひ、海にえりしが
近來海より、たゞのよう、好別、ぬあなり、質の堅く、
代積石より、あらう、うり色、代積より、うま、く、
ぬあ、く、時、より、く、を、お、中、用、い、せ、く、よ、く、
なり

狸胭脂

狸胭脂、祇丸、質、綿、を、紅色、少、深、く、る、もの、より、中、細、画
更、より、積、本、け、し、と、係、る、もの、より、と、あり、其、紅色、を、
と、ほ、り、出、して、ぬ、ゆる、なり、調、を、く、大、巨、蓋、の、中、熱
湯、を、貯、く、狸、胭脂、を、入、く、竹、管、を、く、よ、く、と、ぬ、り、
わ、の、もの、の、を、ぬ、り、除、け、く、紅、汁、を、瓶、小、白、湯
を、た、き、く、き、く、土、瓶、の、口、に、彼の、巨、蓋、を、上、置、重、湯、を、
煎、く、後、で、乾、く、と、な、り、ぬ、く、か、き、なら、よ、く、大、巨、蓋、中、に
調、り、く、乳、汁、の、と、く、な、き、く、ぬ、り、好、ぶ、なり、又、巨、蓋
中、に、ぬ、り、く、と、ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、
用、より、膠、を、入、き、と、ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、
ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、と、ぬ、り、

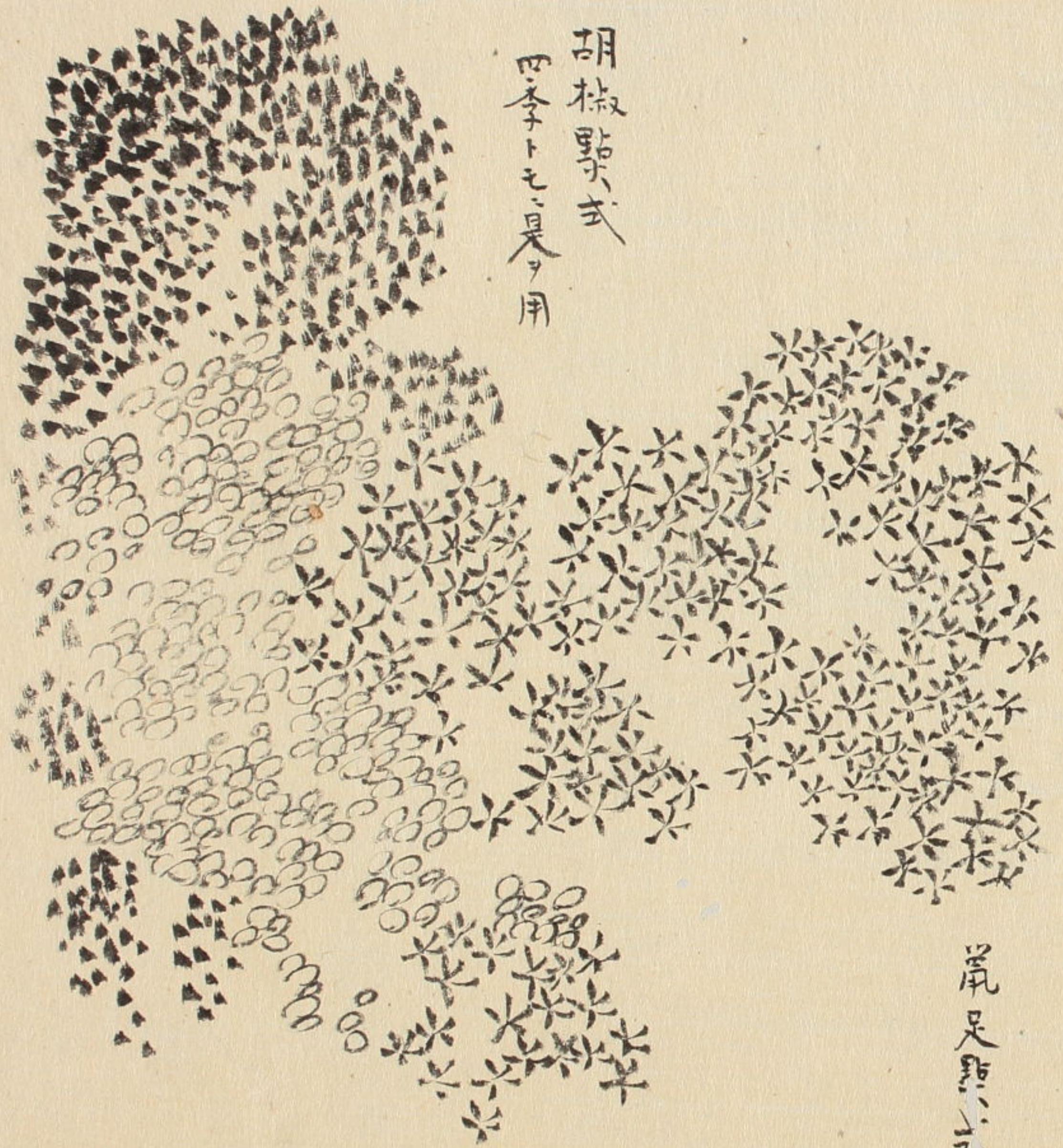
かくもて淡彩小着て妙なり其質ハ脂あぶらのとくもらく
 走く思ふこと一是リ阿蘭陀の産なり信子阿蘭陀アランタ群青
 とく別油絵の具なり高古邦より九つありて画
 上うへの丹青具ハ此邦の顔色具と云ふ事ありし膠かほの
 よめいなるものなり口授ありことなり

筆墨画彩具用法

顔色具いろぐハ其時用申る事とて 襍子ざしとて一なる其用
 其日成就せしむる其日の黄昏ハ顔色具とてあり
 其日成就せしむる其日の黄昏ハ顔色具とてあり
 其日成就せしむる其日の黄昏ハ顔色具とてあり
 其日成就せしむる其日の黄昏ハ顔色具とてあり

鹿角幹法 諸木用





胡椒點式
四季ト之是ヲ用

鼠足點式

菊花點式



介子點式

一字點式

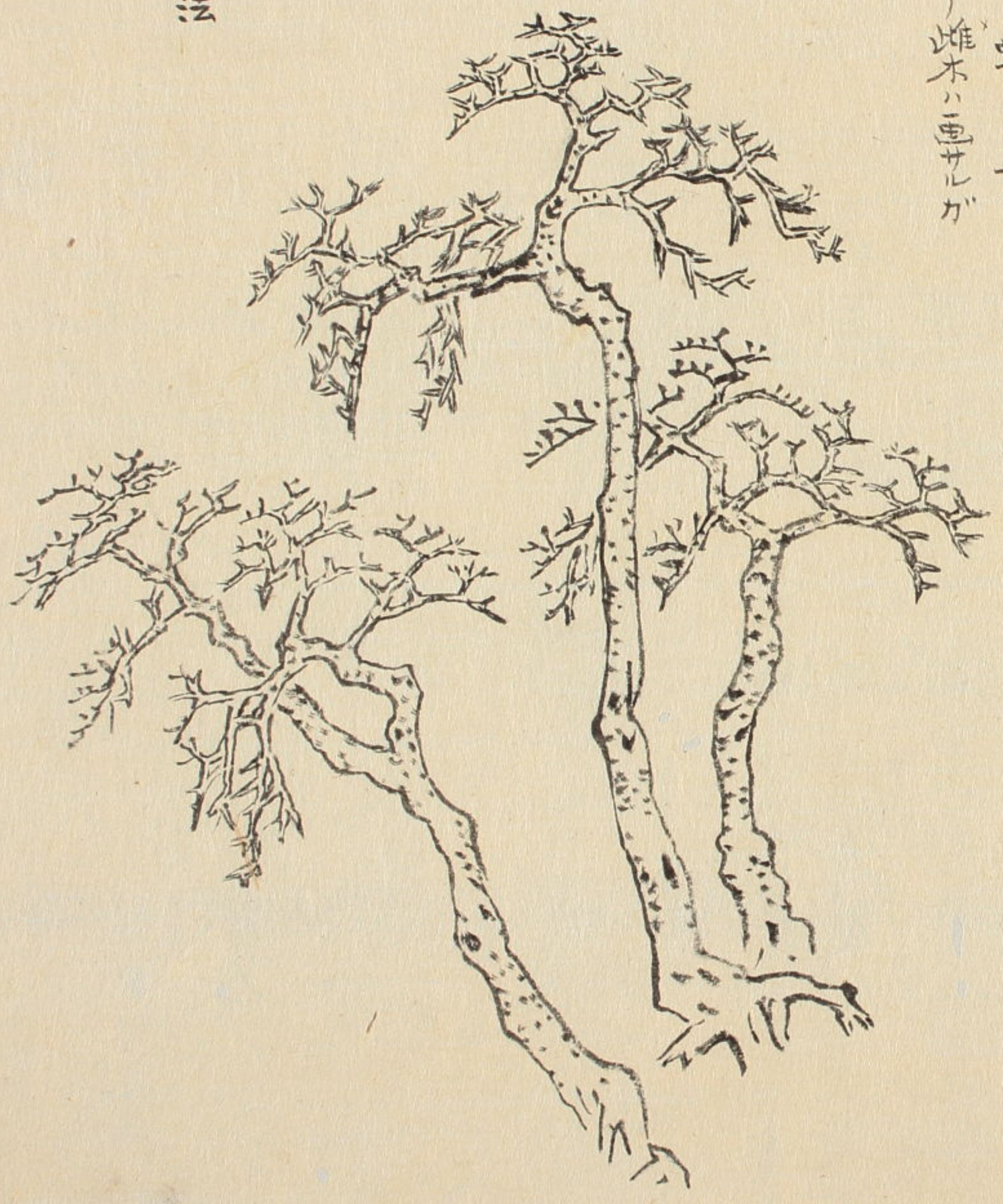
諸雜木葉
三十二

雀爪幹三株相交式
枯樹等ニ多用之



松ノ幹ハ^{ニキ}幹ヲヨリ龍ノ^{ワカ}蟠リタルヤリニ
画クヘシ故ニ雄木ヲ画テ雌木ハ画サルガ
松ヲ画クノ法ナリ

劉松年松幹法



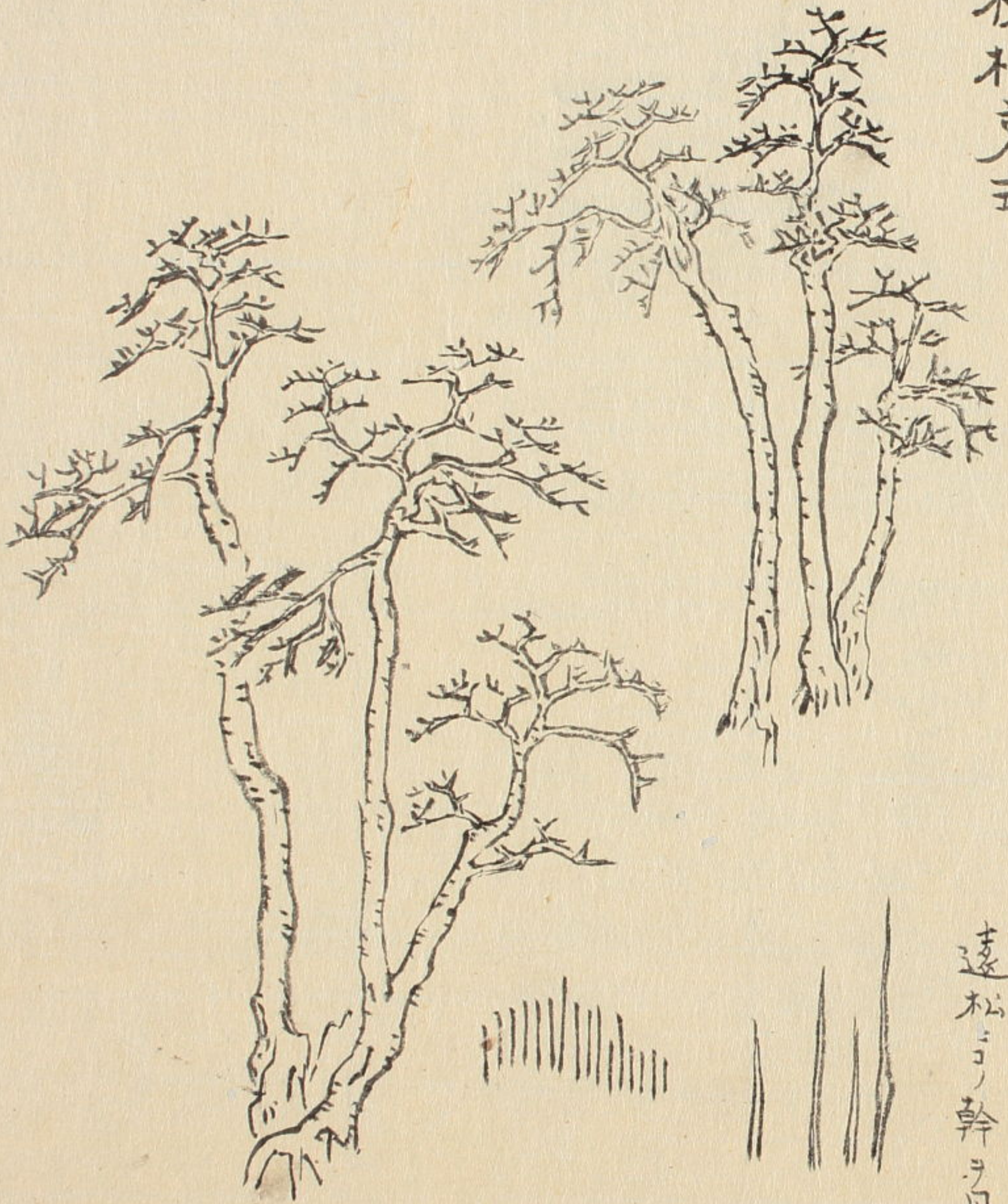
車輪針式

別名ノ葉ナリハ餘
針法多シト云レ
畧ス



諸木ノ葉ヲハ画通ニハ點法ト云テ其
式ニツテサルト前ニセタリ松ノ葉ニ
カブリテ針法ト云テリ故ニ至テツヨク
針ノコトクニカクハニ

松幹三株相交式



遠松ノ幹ヲ用

の中ふとあり青子ありて生紙なまがみのしと和らるなり

席書

席書ハ王侯貴人の前にと書きて大抵生紙なまがみ描のしとれ
るは是ハ席の身ハ画とのゆえにいふもは多筆年
形すくわくハ先書ハ尾形ありし毛筆けしを舒ゆるき
其ハ不生筆をいふ文法をきて描ハ朽筆くしをいふ
中ハ生筆をいふも生筆をいふはしちを席ハ
生筆なまがみならしと生紙なまがみありてあり

名款

畫為成て姓名をとり印をとり名款とあり王侯
貴人ハ其をとりて号ありし字ありし名ありし
姓名を書き引取ありし号の下に名を書き許しと
ありて印を用中ハ天子ハ正中の上位ハ印をとり
他ハ位階ありて中位ハ印ハ下位ハ印をとり持
野家ハ其下位ハ印をとりて謹嚴なるありと
あり吾堂の如きは上頭ハ印をとりて孟浪ありとあり
不以何のとり

印

印ハ天子ハ玉印金印法候ハ銀印洞印庶人ハ

いふすいりあまのるる畫の筆意に綴て雪を摸寫と
しつるしつるたるるるを粉本とす粉本をうけしを
粉寫とす信ふしつる一線寫とす大なる寫を
少き一筆を信寫とす何れも生物をそのまじふ
細密のうけしをいふとすい生物の意を濃く為す
うけしを寫る意とす濃淡をせぬ筆を信紙とす信紙
あつた筆とす濃淡をいふ信紙を熟紙とす熟紙
とす濃筆とす本筆とす筆毛のあつた筆
とす排筆とす小筆とす連筆とす小筆を洗ふのを
筆洗とすの硯を硯地とす硯地を硯割とす
硯割とす雲とす松とす油色とす肉を肉色

とす肉入を肉池とす肉池を淡墨とす
墨を濃墨とす画深法を墨を幹淡と淡直と
し墨を画を墨とす人物の墨を墨を墨とす
を白描とす白描は肉を淡法を墨を骨を白描
とす濃墨とす墨の人物を月とす墨の骨を
墨とす墨とす画粉墨とす描を描骨とす俗法
たつとす墨とす料花とす輪郭を画するを粉
とす粉とす粉色とす粉色とす粉色の念の入
たるを粉保とす粉色とす粉色とす粉色とす
色とす粉とす粉色とす淡粉とす粉色を濃
粉とす山々の粉色を青緑とす粉色とす

画を密画とすはよくてましく物事なる画を合作とす
 は子又ハ集画を合作とすなり會日少少集系なり
 画を兼画とすハ相思画をハ春画とすなり
 青黄赤白黒の五色の外れ色をハ寫色シヤクとす聖賢神佛
 等の彩色ハ寫色ハ用ぬ法なり唯五色を以て彩色とす
 又冲佛一を画くに清淨彩色とす法行りて膠を
 用ハらば濃彩を自由ハらる法行りて授



漢画獨枕音古 乾終

雲二雨一乾

